

おもな作品

*番号は作品リストの番号と一致します。

1 遠城謙道肖像写真 1枚

古賀暁撮影

縦25.5cm 横20.3cm

明治28年(1895)

個人蔵

73歳時の遠城謙道。その性格は純粹で誠実率直、ひとたび心に決めたことは容易に曲げなかったという。容貌は浅黒く、衣服が破れても気にせず、外見を飾り立てなかった。写真は、宮内省御用係の写真師・内田九一門下で東京麹町で開業した古賀暁による。謙道は、井伊家から拝領した井伊直弼遺愛の茶室を直弼の墓近くに移して庵とし、季節や天候を問わず、草1本塵1つ残らぬよう、墓所の掃除を念入りに行ったという。



10 建白書草稿 1冊

遠城謙道筆

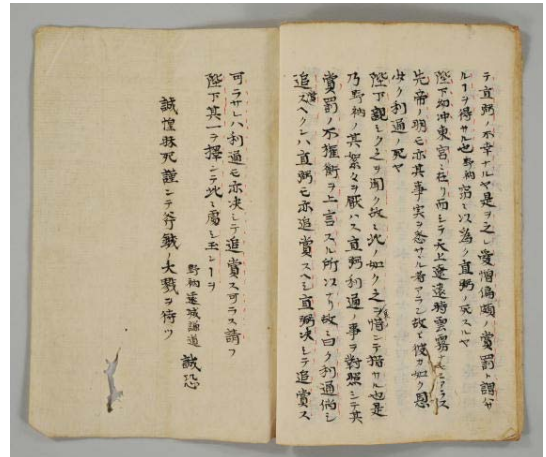
紙本墨書

縦24.5cm 横16.5cm

明治11年(1878)

個人蔵

明治11年(1878)5月、内務卿の大久保利通が暗殺されたが、翌日に官位の追贈があった。謙道は、手厚く扱われている様子を見て、同じく「忠君益国」のために身を捧げた直弼の冤罪は晴らされていないことを嘆き、建白書を草した。はじめ太政官に呈上しようとするが受け入れられず、宮内省、太政大臣、東京府知事いずれに赴いても顧みられなかった。志を果たせなかった謙道は殆ど狂ったようであったという。その後、謙道は、知人が庵を訪ねても一切建白のことは口にしなかった。



20 書簡 大東義徹宛 1通 (写真は冒頭部分)

遠城謙道筆

紙本墨書

縦15.9cm 横68.1cm

明治33年(1900)3月16日

当館蔵(若林繁氏寄贈)

息子 兵造が、日本橋の牛乳販売業の牛乳について、料金を徴収して検査することをやめさせるよう、「嚴重ニ御申聞」せて「御叱付」ていただきたい、と繰り返し訴えている。ただでさえ傷みややすい牛乳を検査することは迷惑なことで、地域の人が困ることを目論むのは以ての外、と言い切る。兵造は東京大学医学部の前身にあたる東京医学校出身で、細菌学の研究者であり、この検査は、公衆保健衛生の業務の一環と見られる。謙道が頼った大東は、同じく彦根藩の足軽出身で、衆議院議員で大臣にも就任した政治家。謙道自身が言い聞かせても受け入れられなかったため、社会的に一

目置かれる義徹に懇願した構図と見られる。当時謙道は78歳。病を患っていたが、その気迫に圧倒される。謙道は、出家後も世捨て人になって過去のみ生きていたのではなく、その強い社会的正義感晩年まで健在であったことが分かる。



22 画賛「藩祖三百年大祭」 1幅

遠城謙道筆
紙本墨画淡彩
縦33.2cm 横22.4cm
明治34年(1901)
個人蔵

井伊家初代直政の彦根入り300年を記念して藩祖三百年大祭が執り行われた。この際、直政を祀る佐和山神社から彦根城天守までの神輿の渡御と、それに伴う華やかな大行列が祭を彩った。当時謙道は病を患っており、遠方からの参加を周囲に止められたが聞き入れず、自身は5～6月が死期であろうと予言していた。参加後に東京の豪徳寺に戻った謙道は、予言どおり5月12日に示寂した。享年79歳。

藩祖三百年大祭
神祖(かんおや)につか(仕)へまして国のため
た(立)ていさを(功)は世にかがや(輝)けり



29 画賛「李白さへ…」 1枚

遠城謙道筆
紙本墨画淡彩
縦34.5cm 横25.1cm
明治時代
当館蔵 (伊吹フミ氏寄贈)

謙道は、好んで画を描き、詩歌をその上に題して画賛とし、気軽に人に贈った。テーマは、直弼顕彰、旧知の人の供養、季節ものなどがある。その多くは、たっぷりとした墨を含んだ勢いある筆で、平明かつ軽妙に描かれており、飾り立てることのない謙道の人柄がよく表れている。本作品は、豪徳寺近くに住む男の子が謙道のもとに遊びに行く度に与えられた画賛のひとつ。

李白さへ暑さわす(忘)れて瀧見かな

